

原発 そこが問題だ

第 10-2 号

2022 年 5 月 13 日

原発反対の会・吹田

wasser861.a@pure.zaq.jp

停戦を実現し、ウクライナに平和を！

ロシアがウクライナに軍事侵攻という自殺行為をするとは予想もしませんでした。近年の世界の課題は米中対立と気候危機でした。ロシアの侵略は 21 世紀の世界を変え、20 世紀の戦争と平和が拮抗する時代に引き戻しました。ロシアは第二次世界大戦を経て、前身のソ連も参加してつくりあげた国際平和秩序を踏みにじりました。

住居を追われたウクライナ住民は 1 千万人を超えました。プーチン大統領は核兵器を臨戦態勢に置き、広島・長崎の悪夢をよみがえらせました。さらにロシア軍はチョルノービル原発、ザポリジャ原発を占拠し、放射能の大量放出の恐怖に世界は震撼しました。

ロシア軍が首都近郊から撃退されるとブチャの虐殺が明らかとなり、東部のマリウポリでも数千人の民間人が犠牲になったと伝えられます。かつてのユダヤ人虐殺、南京虐殺を想起させる戦争犯罪に世界はおののいています。

連日、戦火にさらされる街の惨状とともに、ロシアの旗艦撃沈や戦車を撃破する米国製戦車砲など、さながら実戦による兵器見本市のごとき戦況がメディアを蔽っています。

ウクライナ避難民への救援活動も各国で広がっています。侵略戦争に反対する市民の運動も大きくなっています。ロシアでも数十の都市で反戦デモが行われ、国営テレビでも反戦フリップが掲げられ、科学者 2000 人も即刻停戦を要求しました。在日ロシア人もロシア大使館前で抗議しています。

ロシアの蛮行に日本の改憲勢力が勢いづいています。自民党の緊急安保提言 (4/26) では中国・北朝鮮・ロシアの 3 国を仮想敵国とし、防衛費を GDP 比 2% に増額、ハイテク兵器・ハイブリッド戦・情報戦・サイバー戦への対処、海上と宇宙の態勢強化、国家情報局の設置、敵中枢に対する反撃能力、日米同盟強化、兵器産業と軍事研究の強化、住民避難とシェルター整備など軒並み軍国主義化への項目を並べています。

国家安全保障を担保するのはもっぱら防衛力だとして、戦争を防ぐ努力はまったく視野に置いていません。情報戦とは外国からの偽情報を排除し、当局による正確な情報発信を国内外に SNS 等により訴求できるよう戦略的に発信機能を強化することで、プーチンがやっているような情報戦略を模範にせよと言わんばかりです。

その一方で、ロシアの軍事侵攻の経過や国際的孤立は、そのまま旧日本軍の中国侵略の経過を彷彿とさせています。ウクライナで原発の軍事的危険がクローズアップされ、原発は自国に向けた核兵器と判明しました。原発はそのままにして、軍事には軍事で対抗するという戦略の愚かさがますます明らかになっています。

一刻も早く停戦を実現し、国際法に基づいて戦争犯罪を裁き、国際平和秩序を回復させなければなりません。核兵器禁止条約を実現させた世界の平和勢力の力を強めましょう。

(野口 宏)

キエフ交響楽団のドイツ公演 ——戦時下の芸術活動——

もとより、正常な日常生活からは完全に遮断されたウクライナでは、少なからぬ人びとは、まさしくその国歌にあるように、「自由のためなら身も魂も捧げるのだ」という切羽詰まった精神状態のなかで、日々、生きていることであろう。通常の生産活動も壊滅的であろうが、精神的活動、とりわけ芸術活動もまた、このような状態だからこそ重要であるにも関わらず、その実践は壊滅的な状態であろう——ロシア軍が攻撃する町では、少なからぬ劇場は市民の避難所（防空壕）になっているとのことであるから、その機能が果たせるはずもない（もっとも、避難所の中でも、人びとはウクライナの歌を歌って励まし合っているという）。

この時期、キエフ交響楽団が、まさしく「ウクライナの文化を護る」ことを生死を賭した課題として、ドイツでの演奏旅行を展開している。4月25日のドレスデンに始まり、ライプツィヒ、ベルリン、ヴィースバーデン、フライブルク、ハノーファー、そして最後は5月1日にハンブルクと、7つの町を廻り、彼らは「避難民ではなく国外公演のための出国」という約束であるから、5月5日には、爆音が轟き、サイレンが鳴り響くウクライナへと帰って行くことになる。

演奏会のプログラムは主にウクライナの作曲家たちの作品で、帯同する女性ヴァイオリニストとのエルネスト・ショーソンの《詩曲》のみが、唯一、例外をなしている。

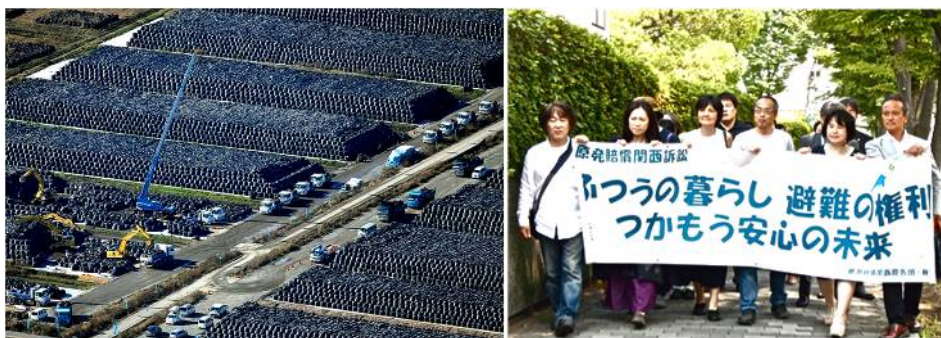
戦火のもと、ましてロシアにとって主要攻撃目標であるキエフで、公演に向けたリハーサルができようはずもなく、すでに全国に散らばっていた団員たちが集結し、特別許可を得て（男子は基本的に国外に出ることは禁止されている）、リハーサルは主としてポーランドで行われたものの、実質的にはそれぞれの自宅で練習に励んだとのことである。

芸術活動を諦め、兵士として軍隊に志願する音楽家は100人に1人ぐらいというが、いまのこの時期、財政的にも絶望的ななかで、そもそもオーケストラが消滅してしまう可能性もないわけではない。今回のドイツ公演は、ウクライナとの連帯のためのチャリティー・コンサートの形を取っており、チケット収入は団員たちの旅費に当てられ、存続の危ぶまれるオーケストラのために充当されるとのことである。

ドレスデンの演奏会の最後には、国歌が演奏された。全員が起立し、多くの人びとは胸に手を当てて、その勇壮にして悲劇的な国歌に聴き入っていたという。

（資料；「ノイエス・ドイチュラント」紙、2022年4月23・24日、「南ドイツ新聞」、2022年4月26日）

（京都市・照井 日出喜）



プーチン大統領は【インフォームド・コンセント】で国政を

私は、助産師、看護師として『健康・命』をテーマに助産、看護業務を務め、定年退職後も助産院、特別支援学校で仕事をしてまいりました。

昨今、ロシア軍によるウクライナ侵略で大勢の生命を犠牲にしているニュースをテレビで視聴するたびに、人間がすることではないと激怒しています。とくに病院、産院を撃破しているさまは許せない。怒り心頭に発する状況で、私は募金しかできません。

プーチン大統領の心理状態が皆目理解できません。新聞記事で目にしましたが、「プーチン大統領のご家族がヒットラーに大変悲惨な目にあった」という記事が書かれていた。今のプーチン大統領の覇権主義、独断、異常な攻撃、暴力は何処からきているのか。

私は思考します。

プーチン大統領は人間の温かさ、ぬくもりのある愛情を受けたことがあるのか、今も、プーチン大統領の行為を人間愛でコミュニケーションしてくれる人はいない。あるいは病気が悪化しているのではないかと気の毒でなりません。

直接、犠牲になられた家族、愛する人、知人等々、永遠に恨みが残るでしょう。

長年作り守ってきた文化遺産破壊に対しても許せない。

私は長年、健康、命をテーマにして人生を送ってきました。

私は助産、看護する立場でいつも心がけていたことは「自分の愛する娘、息子、両親、愛する人に置き換えてコミュニケーションを取りながら」対象者が主体的に選択し自分の健康といのち輝いて人生を繋いでいけるように勤めました。

まさに、【インフォームド・コンセント】を大切に。

プーチン大統領は【インフォームド・コンセント】で国政を務めていただくことを切望致します。
(摂津市・杉原勝子)

核による自然・人間の支配

1. 原発（核発電）は「平和利用」か

ロシア軍は2022年2月24日ウクライナに侵攻したが、同じ24日、廃炉中のチョルノービリ原発を占拠し、さらに3月4日、ザポリージャ原発第1号機を攻撃、火災を発生させ、占拠した。ロシア軍侵攻当時、全15基の原発中13基が稼働中で、国内の全電力の54%を占め、世界第8位の「原発大国」（2021年1月現在）である。ロシアのウクライナ侵略は「戦争と原発」を正面から考えざるをえなくした。

原発は「平和利用」として原爆と区別されてきたが、ロシア軍が原発施設をも攻撃・占拠した現実はこの区別がもはやできないことを明らかにした。それとともに、日本も2011年の福島第1原発過酷事故後も脱原発に踏み切るのではなく、再稼働を増やしている。

1999年9月には茨城県東海村のJCO社（核燃料加工施設）において、臨界（核分裂反応が持続的に起こること）を防ぐための「形状管理」（ウランを取り扱う設備を物理的に臨界が起こり得ないような形状にすること）がなされていない作業工程で、日本で初めて臨界事故が発生

し、3人の労働者が大量の被ばくを受け、うち2人が原爆にうたれたような無残な姿で亡くなった。これは安全無視の構造的欠陥である。

さらに、1981年6月、イスラエルの空軍機が建設中のイラクの原子炉を爆撃し破壊した。幸い核燃料がまだ装荷されていず、大きな放射能災害には至らなかった。しかし、現実にはロシア軍の砲撃を受けたザポリージャ原発1号機は核燃料も装荷されていた。これから放射能災害が起こる危険性は大きい。

2. 核による自然・人間の支配

現代文明は本質的に暴走状態（巨大化、微細化とスピード化）にあり、戦争、環境破壊などにみられるように、地球的・人類的視点から近い将来、破局にいたる可能性が危惧されている。そして現代科学技術が良きにつけ悪きにつけ、現代文明の推進力としての役割を果たしてきた。科学技術の「健全さ」（パフォーマンスと効率のよさ）それ自体が社会問題の源泉になっている。

核を利用した権力支配においては、第1に、軍事利用としての核兵器は国家権力によって世界の民衆を支配するのであり、具体的にはアメリカによる広島・長崎への原爆投下、ウクライナにおけるロシアの核脅迫があり、核兵器の使用さえ危惧されている。第2に、産業利用としての核発電は「平和利用」などではなく、常に放射能の危険に脅かされながら巨大なエネルギーを利用する資本による自然・人間の支配である。

このように、軍事利用であろうと産業利用であろうとその基礎にあるものを統一して捉える必要がある。それは、究極の科学技術としての核そのものの支配性である。原子核の分裂は巨大なエネルギーと放射性物質（死の灰）を発生させるが、それは物理学の世界、核の世界に固有であるのに対し、地球（自然と生物）の世界は原子核の安定によって成り立ち、自然的・生物的原理に支配されている。

このような、核の自然・人間に対する支配性をもとにして、核を利用した権力支配を把握する必要がある。

3. 原発攻撃への抗議

3月4日当日、ザポリージャ原発をロシア軍が砲撃・占拠したことをうけ、国連安保理事会で各国は「核テロ行為だ」「ジュネーブ条約第1議定書違反だ（原発などを攻撃し重大な損害をもたらす）」とロシアを強く非難した。また3月23日、ウクライナのゼレンスキー大統領は、日本の国会に向けたオンライン演説でチェルノブイリ原発の占拠に対し「ロシアは核物質の処理場を戦場に変えた」と強く非難した。同時に、ウクライナがロシアを撤退させることを心から願うが、その暁にはエネルギー政策を再検討し、「原発大国」政策をぜひ止めるべきである。日本国内でもロシア軍の原発攻撃・占拠に抗議し撤退を求めた（原子力資料情報室、原子力市民委員会、原発ゼロの会・大阪、原発反対の会・吹田、日本共産党など）。

しかし、日本の科学者を代表する組織である「学会会議」や「日本科学者会議」がロシア軍の原発攻撃・占拠に抗議しないのは理解に苦しむ。

（吹田市・青水 司）

自然の原理・法則から逸脱する人間の罪深さ

コロナ禍のこと、ウクライナのこと、知床における観光船転覆のこと、なんと人命が粗末に扱われていることでしょう。看護師として「いのち」を第1にと向きあってきた者にとって、あまりにも理不尽な昨今の世相に発する言葉も見つかりません。そんな折、書店で見つけた本があります。

☆『理不尽な進化－遺伝子と運の間』芳川浩満著、ちくま文庫、1210 円（税込）

米国の古生物学者ディヴィッド・ラウプは、生命の歴史 40 億年のなかで、地球上に出現した生物種の総数は 50 億から 500 億ではないかと推定している。さらにラウプは、今なお存続している生物種を 500 万～5000 万と推定している。ここから割算して今生きている種は全体の 1000 分の 1 くらいではないかと言っている。すなわち、出現した生物種の 99.9%はすでに絶滅しているということである。ディヴィッド・ラウプは、絶滅生物のうち膨大な化石記録から次のような問いを発している。

「長い地球上の歴史のなかで、これまで何十億もの種が絶滅してきた。それらは適応面で劣っていた（遺伝子が悪かった）せいで絶滅したのであるのか、それとも単に間違った時期に間違った場所にいた（運が悪かった）せいで絶滅したのだろうか」と。

私はこの本を読んで次のように考える。

「遺伝か運か」という興味深い発想もさることながら、世に出てきた 99.9%の生物種が絶滅しているという分析による結果は、現在 0.1%が生き残っているということになる。果たして人間はこの 0.1%の生き残りのなかでどのような存在なのか。これらの考察は、この本の著者である吉川浩満氏に委ねるとして（大変興味深く読みました）、私はこのような数奇な生き残りをしてきた生物のなかで、人類だけが運命に逆らうとてつもない罪を犯しているように思う。

すなわち、原子爆弾に始まる核兵器である（原子爆弾・水素爆弾・中性子爆弾、また核弾頭を装着したミサイル）。

人間も生物（動物）ゆえ、生存をかけて生きていると思うが、他の生物はどうであろうか。私個人としては、どう考えても人間のみが自然の原理・法則から逸脱していると思う。

現在、地球上に生きる 0.1%の生物の行く末を考える時、人間の罪深さに心塞がれる思いである。

ささやかではあるが、個人個人の想いが集まれば大きなうねりとなり、戦争や侵略の阻止、核兵器の製造・使用禁止に貢献できると思う。

（滋賀県守山市・三宅睦子）

（三宅さんは、「理不尽な進化」からはじめられたので、どこへ連れていかれるのかと思っていましたら、わたしたちが今、もっとも考えなければならない「自然の原理からの人間の逸脱」に導いていただきました。有難うございました。事務局）